

## [課題演習概要]

# する・みる・支える・知る保健体育科学習 —ダイバーシティマネジメントに着目して—

大 神 遼  
Ryo OOGAMI

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース

キーワード：する・みる・支える・知る，ダイバーシティマネジメント，同化，認識，統合

## 1 研究の目的

本研究では中学校の保健体育科学習において「する・みる・支える・知る」体育科学習を実践していく上で、運動能力の差異及び生徒全員の知識や経験を活かし、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成したい。そのために、ダイバーシティマネジメントに着目した保健体育科学習指導のあり方を究明していく。

## 2 研究の計画

M 2	9 月	研究内容の仮説・検証
M 2	10 月	実証授業
M 2	11 月	実証授業，考察
M 2	12 月	研究内容の考察

## 3 研究の内容

### (1) ダイバーシティマネジメントについて

東京商工会議所(2009)は「ダイバーシティマネジメントとは、通常『多様性』と翻訳され、企業経営においては『人材と働き方の多様化』を意味する。従業員の様々な『個性を基とした違い』を企業内に取り入れ活用することで、組織力を強化することが可能である」と述べている。さらに、ダイバーシティマネジメントを行う上で重要なポイントとして次の3ステージを示している。

①**同化**…組織の成員の多様な価値観を尊重し、受容すること。ただし、違いがあることはわかっているが、お互いがどのような個性があるのかわかっていない状態を指す。

②**認識**…全成員で組織の使命や組織が大切にしている価値観を共有すること。

③**統合**…共有するために経営者が率先して多様な価値観を受容し、互いを成長させること。

このようにダイバーシティマネジメントは、協働や学習を通してお互いのことをよく理解し、どのように行動すれば多様性を活かし、よりよくなるか模索できる手法・方略であると考ええる。

### (2) ダイバーシティマネジメントに着目した保健体育科学習

保健体育科学習においても、ダイバーシティマネジメントの考え方を取り入れ、個性を活かした授業を実践することで、4観点「する・みる・支える・知る」体育科学習の具体化・具現化が容易になると考えた。このことについて松村(2017)は「する・みる・支える・知る」の4観点を学習過程に位置付けた単元構成を開発して実践を行っている。ここでは、単元構成として各段階に応じて「知る活動，する活動，みる活動，支える活動」の4活動を順序よく位置付けていた。

そこで、ダイバーシティマネジメントの考え方を取り入れ、松村の実践の課題を解決するための単元構成を以下のように考えた(図1)。

学習段階	3 ステージ	4 観点
つかむ	同化	する，みる，支える，知る
つくる	認識	する，みる，支える，知る
深める	統合	する，みる，支える，知る
まとめる		する，みる，支える，知る

図1 ダイバーシティマネジメントに着目した単元構成図

### (3) 単元をもとにした実践内容

対象	公立K中学校
単元名	テニスボール
配当時間	8時間
単元の目標	自他のよさを認め合い、運動能力の差異に関係なく、誰もがスポーツを楽しむことができる。

#### (4) 授業実践

ダイバーシティマネジメントの3ステージと体育科学習における4観点に対応させた単元構成図では、松村が構想した各段階で4観点を単体で位置付けるのではなく、4観点全てを段階に応じて重点的に位置付けて構想した。

以下、中学校第2学年単元「ティーボール」をもとに具体的に考える。

##### ①つかむ段階…ティーボールについての理解を深め、個々の得意不得意を明らかにするために、具体的な活動を通して、ティーボールの文化、基礎的な動きを知る。



##### ②つくる段階…ティーボールのおもしろさ及びやりがいを見出し、協働的に見出していくために、どのような練習が効果的であるかチームのメンバーと話し合いメニューを作成する。



##### ③深める段階…生徒のティーボールへの興味・関心を深めるために、チームがよりゲームを楽しめるルールやチームをつくり、ゲームを行い、観戦する。



各話し合いにおいて、個々の意見を尊重する姿がよく見られた。グループの中には全員の考えた作戦をゲームの中に取り入れ、どのような結果になるか検証するグループもあった。

##### ④まとめる段階…各チームの作戦が活きることを体感するために、各チームの作戦や戦略の共有を行い、(する、支える)、面白さを体感できるようなゲームを行う(する、みる)

#### 4 成果と課題

今回の授業実践を通して、「する・みる・支える・知る」各活動を「同化」「認識」「統合」で位置付けることができた。そこで生徒同士の声かけもお互いの得意不得意を見極め、場面に応じた話し合いや作戦を立てることが可能になった。具体的に

は、以下の成果と課題が明らかになった。

- ①同化のステージにおいては、生徒自身に何かをさせるというのではなく、指導者の今後の方針を伝えていくことが重要である。
- ②認識のステージにおいては、お互いの交流の場面で何ができるか、自身のプレイをゲームにどう活かすかを話し合うことが重要になってくる。
- ③統合のステージでは、お互いの得意不得意を理解している状態であるため実際にどんな交流をしたのかなど、実際の行動や学習プリントから読み取ることができた。



ゲームを進めていく上で、回ごとに作戦会議を行うことで互いの個性を理解するようになり、他者を思いやるような言動が多く見られた。例

えば、「〇〇君の守備の動きが参考になった」「△△君は遠くに打つのが得意だから打順を最後の方にした方がいいと思う」などが見られた。今後継続的な授業を行なっていく際に、このマネジメントを行うことで、生徒同士の人間関係やより効果的に「する・みる・支える・知る」保健体育科学習を効果的に行うことができると考える。

一方課題としては、以下の通りである。

- ①活動を活性化させる場やチームづくりの観点、交流の在り方を工夫する必要がある。何について話し合うかなど、交流の主旨を伝えなければ具体的な戦略を考えることができなかった。
- ②学校単位で意思疎通を図る必要があるということである。全員がマネジメント手法をよく理解し生徒に指導することで、合理的に育成できると考える。そこで、学校での研修の場の充実や生徒理解を深く考えていく必要がある。

#### 主な引用・参考文献

- 東京商工会議所 (2009) 中小企業のためのダイバーシティ推進ガイドブック  
 中村 豊 (2017) ダイバーシティ&インクルージョンの基本的概念・歴史的変遷及び意義  
 文部科学省 (2017) 中学校学習指導要領 (平成29年度) 告示解説保健体育科編  
 松村さやか (2017) 体育の見方・考え方を働かせる子どもを育てる体育科学習指導 ～知る・する・みる・支える」の4つの活動を位置付けた単元構成を通して～  
 東京都教育委員会 (2019) 教育研究員研究報告書 保健体育